

彙報

哲學會春期公開講演會

五月二十日(土)午後一時半から法學部第一教室で開催左の講演を行った。

一、實驗の反省に就いて

文學士 岩井勝二郎君
文學博士 高瀬武次郎君

一、結婚論
講演終了後學生集會場で會員の晩餐會を開いた。

金曜會例會

四月二十一日(金)午後七時より學生集會場で次の論題について盛に談論した。出席者、久松、岩井、伊藤、篠崎、務臺、白井、

三木、大脇、加川、伊東、其他學生數名

個性の問題 哲學研究一月號)

三木 清君

五月十九日午後七時より同じく學生集會場で例會を開いた、論題次の如し
カント哲學に於ける「實踐的」の意義(哲學研究四月號)

務臺 理作君

哲學會例會

四月二十五日(火)此度獨逸に留學される三木清君の送別を兼ねて次の講演があつた。

重く考へて居らぬやうに見える。埃太利のフロイドを中心として、同じく埃のアドラーや瑞西のユングや、米國のジョーンスなどの人々によつて率ゐられて居る精神分析學も亦、從來の形式的若しくは知的な「浅い」心理學に對して所謂「深い」心理學を樹立せんとし、其の所説に往々極端淺薄な所があり、又彼等の仲間同志に可なりの意見の相違があるけれども、在來の「體系的」な心理學に對して叛旗を翻へし、これに一脈清新の氣を注入せんとするに於いてはいづれも其の軌を一にして居る。

かくして二十世紀の心理學は、次第に體系的より個々研究的に、知的より情的本能的に、「浅き」より「深き」に抽象的より具體的に進み行きつゝある。

カントの「想像力」について
 務臺 理作君
 三木君は伯林に當分滞在される由、西田、朝永、波多野教授も出席された。

教育研究會例會

五月四日午後六時半より學生集會場に於て開會、文學士高橋俊乘君が「平安朝の教育」と題し約二時半に亘りて講演せらる。

講演の内容は主として氏の創意にかゝるもののみであつた。就中當時の大學が從來の日本教育史に於て官吏養成機關と解されてゐるのは誤りて「詩文に長けた學者の塾を政府が保護せるものなり」と斷し、菅家遺誡中にある和魂漢才なる語が何れの教育史にも誤解されて掲載されたり等と引證該博論理明晰に論じ去つたのは痛快な氣がした。實に近來稀れな究理的氣分に充ちた講演であつた。

倫理學會例會

五月二十六日午後六時から學生集會場で左の講演を開いた。

Ayres, The Nature of Relationships between Ethics and Economics.
 藤井 教授

社會學會

五月十八日(木)午後七時より學生集會場で例會を開き次の講演が行はれた。

漢字に現れたる道德と社會の關係
 文學士 白井 賴吉君

新著紹介

メーリス

宗教哲學緒論

征矢野見雄譯

嘗てある友人から面白い書物だから讀んで見よと紹介せられて一小冊子を読んだ。そして明快流麗な文章と著者の藝術的官能の豊かさを思はせる様な叙述と譬喩に魅せられた、それがこの譯書の原著であつた。

著者の若々しい情熱を盛た美しい文藻がこの書全體を麗びしく織りなしてゐる。或はローマのミケランセロやラファエルの傑作の讚美に於て或は恋や死の叙述に於て更には神祕意識の説明に於て吾等は稀に見る美はしい表現に出會ふ。そして又此書全體を通じて藝術が常に宗教の美はしい双生兒として示されてゐる。此點から此書は我々をしてシュライエルマツヘルSchleiermacherの宗教論を想ひ起させるのであるが、兩者の氣分は異つてゐる。前者は宗教を藝術に近付ける事によつて宗教の特異性を明にせんとし後者は藝術から區別する事によつて宗教の特異性をより微妙に理會せんと努める様に見える。

併し乍ら著者の文學的才能の豊富は却ていくらか此書の哲學的價値を減損した様である。此書から得られる觀念は決して明確だとは云ひ得ない。此の事の來由は單に此書の表限の仕方によるのみ求めるべきではない。當の對象である宗教意識其物の非合理的であ